Aくんとの一日

吉岡　晶子

先日、愛育養護学校の家庭学級に一日だけだが参加できる機会があった。名前もなにも知らない子どもたち、全く白紙の状態での出会い。たった一日の体験だったが、いつもと違う状況の中で自分自身のことにハッと気付かされたり考えさせられる貴重な経験になった。

はじめに各部屋の説明と、いくつか気をつけることを説明していただき、「では、どこでも誰とでもどうぞ」ということになった。一人になった私はさてどうしよう、だれも〝おはようございます〟でもなければ〝先生、先生〟でもない。どうして良いかわからず、ウロウロしながら落ちている絵本を拾ったり積み木を片付けたりしていた。そのうちになんとなくAくんの近くにいて、Aくんと

一日を過ごすことになるのだが、今思うとどこでどうしてそうなったのかよくわからない。おそらくはじめはすがるように私がAくんのあとをついて行ったのだろうと思う。

（Aくんは、幼稚園の年中組で自閉的傾向があるということをあとで知った）

絵本を見たり、電車をさわったり、ままごとのごちそうを口にしたりあちこちちょっとずつやってみて動きまわるAくんのあとをついて行くが、私は何をしてよいかわからず寡黙になっていた。Aくんは何も言わないので無言に近くなってしまったのである。言っていたことはAくんが広げた絵本に描かれている物の名前など名詞が多かった様に思う。他の先生方は子どもたちとさりげなく言葉を交しているのに私は言えない。「さりげなく、さりげなく」と思っていた私は言葉をかけたり交わすことでのつながりを求めていたのだろう。そのうちAくんはトランポリンに乗り、跳び始めた。私はAくんの手を取りながらジャンプにあわせて「ピョーン、ピョーン」と何度も言い、ホッとしたのを覚えている。

次に外に出て園庭にある遊具の高い所に登り、上にあった石を下に落としはじめた。幼稚園なら「これは危ないからやめましょう。下にいる人にあたったらけがするでしょ」と言っていただろうと思いつつ、この状況では危険もないし、いざとなったら私が止めればいいかと思っていた。その頃には、私も無理して話すこともないと思い始めていた。Aくんは石を下に落としてはキャッキャッ笑うのである。何度も繰り返す。下に石を取りに行ってまた落とすのである。そのうち私にも

やってみたらということか（私はそう受け取った）、石を私に渡すので、何回か落としながら石が地面に着くまでの一瞬のスリルを味わい、一緒に笑ったりしていた。その間の私の話していることといったら「すごいねえ」とか「落ちたねえ」だったり、自分もやってみてからは「ワー」とか「キャー」だった気がする。

今度はタイヤのブランコ。ゆらゆら揺れていると私は「ゆーらゆーら、ゆーらゆーら」とつぶやく。Aくんは小さな水たまりを見つけ、そこに落ち葉を入れる。私も入れる。Aくんは手を入れてパチャパチャする。私もパチャパチャ、そして「冷たいね」。Aくんは何も言わない。私がその時感じたことを口にしていた。Aくんは水たまりの水を手ですくってなめようとする。水は茶色。私は「おいしい？　ちょっときたないね」と言いつつも、お腹こわすこともないでしょうと水をパチャパチャ。ひとしきり水たまりで遊んで室内にもどる。

お気に入りのいすにすわる。そして私にもすわれというしぐさで手を出すのである。その時のうれしかったことは、はっきり覚えている。二人でいすにすわり大きな布にくるまる。はじめは顔を出してくるまっていたAくんはそのうちもぐってしまう。Aくんがこのいすにすわって布にくるまることは、Aくんの好きなことのひとつだったそうです。「あったかいね」など言っているうちに、私の方でなんとなくフムフム口ずさんでいた。そのあと、場を変えてどこかへ行こうとする時に、私の方を見て手を出してくれることもあった。

話そうとか言葉をかけようと思わず、無理しないようにしてからの方がずっとらくに自然に言葉が出て来たように思う。なぜこんなに言葉を意識したかと言えば、日頃、言葉を介しての子どもたちとのやりとり、言葉でのコミュニケーションにいかに頼っているかということではないだろうか。五歳児の担任となった今、言葉で通じることが増えてきている。子ども同士も言葉でのやりとりは多い。でもその前に同じ感覚、同じ気持ちに近づくことの大切さをあらためて感じた。子どもたちが言ってほしいというより、こちらが言いたいことを言っていた気がする。（もちろん、言いたいこと、言わねばならぬこともあるが）声をかけたり、言葉を交すことで安心していたこともあったと思う。通りすがりの一言を子どもたちはどう聞いていたのだろう。

お迎えの時間が近づき、人の出入りが始まった。誰かのお姉さんらしき小学生が部屋に入り一言二言話をしたら、私は思わず「それはね、」と元気に答えていた。そんな自分に本当に驚いた。

Aくんにとってどういう一日だったのかはなんとも言えないが、私にとっては、自分の行為を意識し、見直す良い機会だった。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）